新編水滸畫傳

九編

壹

875
81

へ21 875 81

唐本百回本翻譯

高井蘭山翁編譯
葛飾北齋主人畫

新編水滸畫傳 九編 全十冊

浪華書林 岡田羣玉堂製本

遠21 門 875 號 卷

新譯水滸畫傳九編統目録

前帙五卷第九拾回中より第九拾五回ふくる

明治三十六年 十月 一日 購求

卷之八拾壱

雙林渡〻〻燕青雁を射

張順夜金山寺を伏す

卷之八拾二

宋江智略もつて潤州城を取

盧俊義兵を宣州道に分

宋公明大に毗陵郡に戰ふ

卷之八拾三

混江龍太湖〻を小〻義を結ぶ

宋公明蘇州を埈ふ大ふ會し

卷之八拾四

密海軍ゝ宋江孝を帰を

卷之八拾五

湧金門ゝ張順神と帰を

張順が魂方天定を捉ふ

宋江智とりつゝ密海軍を取

浚帙五卷第九拾六回より第一百回ふ滿尾を

卷之八拾六

盧俊義兵を歙州道ふ分

宋江大ふ烏龍嶺ふ戰ふ

睦州城ふ爺鄧元覚と戰る

盧俊義大ふ昱嶺關ふ戰ふ

卷之八拾七

宋公明智とりつゝ清溪洞を取

魯智深浙江ふ坐化を

卷之八拾八

其二

宋公明錦と着ゝ郷ふ回

卷之八拾九

巻之九拾

宋公明の神蓼児洼ゟ裏
徽宗帝夢ふ梁山泊ふ遊

繪本新編水滸画傳

全部 九拾冊 満尾

新編水滸画傳巻九拾大尾

新編水滸画傳巻之八拾一

東武 高井蘭山翁 譯編

○双林渡とく蘆雪雁と射

此より翁ふ一日宋公明凱旋の途双林渡とゝ処あゝ。天と作ゞ
ゝるふ。數万の蘆雁次第と乱〳〵。紛〳〵と乱れ〳〵落る
きの様あり。宋江中ふ悩〳〵。吏屠ゝ自〳〵然次第ふ後〳〵
列ふしたるものなるふ今〳〵のゆく〳〵渡乱〳〵てゝと乱れ〳〵落るく
の。宋あるゝいう紅寺吳のとゝと只顧奇ミる処ふ前軍一同ふ驚
動して声のゆゝと騒ゞれば宋江中軍ゝこれと少ふ進人と乱
くゝ半と向セるふ浪ふ蘆雪神ゝ弓箭と学び〳〵時ゝと乱
屠と射るふ一箭も中箭なしよゝ。今又絨のゝゝゝと乱屠

と射く。こゝに十羽あまり射落しゝるを彼軍これを聚て絡初
すと報じゝれば宋江聞て大ふ嘆じ今数行の雁を射て知
るべき云あり四象我涼くこれと悔くりるふ豈知んや蕭嘉穆と
射んとて不迷蕭嘉穆と呼れば蕭嘉穆と応せゝ宋江ゞ初
ふ沈吟まり宋江問ゝ云我今汝ゞ雁を射るゝ実るゝ果しゝ
此年ゝ蕭嘉穆云我昔日初ゝ弓箭を学びゝ時分中
の雁雁を射るゝ一番も漏まゝ此今徒ふ箭を放ゝ中年
の雁雁十羽を射落ゝぬと云ゝれば宋江嘆じて云弓箭い
武芸の勝る不あれば何ぞ必ゝも彩めゝ徒んや我思ふ雁ふ
と異なるの二ゝを逃ゝ江面の地ふ初り初春ふ又回る丈雁い仁
義の舎ゝ二十或ゝ三十皆お儀て列ゝ言去ゝ

初ふあり舟を寄て岸ふ上ゝ列ゝ沢庵を示して而後ふ雁も
のん雄を失ひ雌を失ひ雌を失ふゝ死ふ初ると再ゝ配せ
びゝふ伝ゝ此禽い仁義禮智信の五徳を備ゝ此禽中ふ
於ゝ友を失ふ時い尽ゝ哀鳴ゝ此雄仁也ゝ雌を失ふ時
も再び配せびゝ此列義ゝ沢庵ふ伝ゝ列ゝ徒ゝ列ゝ徒ゝ
此列ゝ徒ゝ列ゝ徒ゝ暴さの列ゝ徒ゝ自ゝ
逃ゝ逃る此列ゝ智ゝ毎年秋い南ふ向ふ時ふ群ゝ
来往ゝ此列ゝ信ゝ此ゝ列ゝ信ゝ此ゝ列ゝ信ゝ
教ゝんや宋中一羽の雁お列ゝ
人ゝ十羽の雁と射るゝ我等ゝ
豈ゝ此ゝ嫁ゝ此ゝ此ゝ

とかくれ蘆書代てとを笑く熟くとして言ふ大ふくれを悔くれ
そ愛さくふあくざくり。宋江無欲の体くり一その待を吟して云

山嶺崎嶇水渺茫　横空雁陣両三行
忽然失却雙飛伴　月冷風清也断腸

宋江侍と詠くす〳〵首ふ中ふ悔く。自くを痛くむ。夜去
と双林渡のほふ屯して行ん中ふ遊ぶ者を射ることを嘆く列
筆と探く一その河と書を絵ふそく

楚天空濶雁離群。万里恍然敬馬散。自顧影下寞塘止
草枯沙淨水平天遠写不成書只寄的想思一點暮日
空濠暁但古塹訴不盡許多哀怨揀盡蘆花無處
宿嘆何時玉開重見。嘹嚦憂愁鳴咽恨江渚難留

憲詣觀他春晝歸來晝梁雙燕

宋江河と書録く。芸用ゆ孫後ふ。宋江相替くとして乗まくり
ふ。ふ。ご無意憂戚の思ひあり。宋江相替くとして乗まくり
ら。ゆ。夜晨用ふ酒意と役けく。宋江と射ゆ己ふ寄ふ寄ふ
絵りくる。ゆ。日平天ふ法れ合るふ乗ふ歩ふ。ゆ。
時芸ゆ。の天乗くく意相濃深しゆ。宋江絵居いくく憂と
添。ふ。ふ威敬己ざくり。扱動令を持くる征伐も無ふ功と立
ゆ京のことを奏く。例ふ伝く吾を陳橋驛ふ兵く勅令の傳るを
待知ふ黄門侍郎ふ命じるひ。宋江乗甲冑と著しゆ。乗用と
ゆ教免ありゆ。ふ伝く百八人。戒装を長く盃と裁さ東京門
より乗回く。ゆふ文徳殿ふ乗く。微宋天ふ乗れく。音乗乗と

宋江飛雁の詞を筆に

唱へ給へる。天子よい法英雄の威風凛々として。お貌半々うるとん
て大ふ御威光をあらく宣ひ給へる。汝等卒を率ひて敵と
戰ひ。功を奏し凱陣せよと。古今希なる勲労なり。朕あぐ恢ひふ
ばざるべし。宋江再拜して云。陛下の洪福ふ仍く朝敵
と退治せんが為ふ傷つき勢ありといへども。今各々半ふ仍
宋々天敵を殺し。なほと宋ふ主上の威徳の致す処なり。
等が力ふあらず。天子此時宋江ふおゐ皮爵を授んと欲し給ひて
省院の官と評議あり給へる。大帥蔡京。樞密童貫兩人奇
々奏々云。今宋江ふ羅織起こし天下未だ安んぜざる宋
江ふ大官を授けのうんとの。狂あぐ早し。宋江を以て保義

郎常御兼機正文皇城使。盧俊義を以て宣武郎常御
兼機行吳國練使。吳用ふ三十二人を以て軍士。朱武等
七十二人を編ね宋。又金銀を賞し労を賞し。所皆賞
賜ふ服もべし。天子儀ふ同じ。列文徳殿ふ於て宋江等を
賞と授け。又金銀紙疋を賜ふ。宋江等よ
し御殿を退出し。翌日天子御の袍を一套。金甲一外名馬一疋と
れと宋江ふ賜り。廣慶義ふ下の法れふも於て御賜ふ宋
江ふの法大ふ感ふ。又文徳殿ふ於て大ふ宴
と設けて宋江ふ法ふ御器と湯ひ三度まで皆堂と嘉うる。
宋江ふ下至恩を謝し。退出しるる。次の日公孫勝宋江が
宮中ふ参り恭しく申ふ。日ふ半御暇を人我ふ今下じ云

汝家將軍ふかく功を立ゝ悉く東京ふ回らるゝ再び梁山泊して
老女と生書し給ひ乃御とも修行せんと再こゝを名ぜり家ふ
今日功成名遂ゝ人よゝ我久しく逗留し家ふ帰とのゝ
別今法豪傑ふ別まゝ山中ふ帰へし。然るに我ゝと家ふ人。
家ふ見と笑ゝ笑ゝ云ふ別云孫楊ふ對して云我昔日
法豪傑と出張し時ふ花の宴ぶ会ふ花の宴ぶ今日又お別ふ花の宴
ふ別ゝ。我何ふ羅漢ふ人ふ〳〵時ふ功を立ゝ帰ふ迷云孫
生と還すべし〳〵と約束し田ふ今又留んとい難ふ別
で別まと思ひんやとていよ〳〵嘆ふ堪ずゝ云孫楊又云我ふ
半途ふして家ふと棄ゝ別ふ寡情なゝん今日ハ家ふ大功
を立ゝひ〳〵よなれば我ふ何の名ゝあゝん云別と
くい家ふ曲ゝ我屋と渡へゝ家ふ和思ひずとゝ。留めゝ
ゝ日別酒宴と設けゝ云孫楊とむゝ法の豪傑と共ふ別
情ふ盞の金銀と残ふ送りる。云孫楊ふと謝して終月酒
酌聖日朱唇ふ紅牡丹朱と酒へ家ふ法英雄ふ辞して宴中と出
けまゝ家ふ自〳〵歩ゝ互ふ涙とゝぐふ別まと嘆ける
ゝ時ふ月もとゝ近くなりしゝ茶店ふ宿して孫の友人
別〳〵別ゝの用意と酒つり茶店ふ中ふ悲乃家ふ百八人
の茶別〳〵別ゝふ出すゝ天ふ必ゝ〳〵用ひんと我ふ心ふ是
と担らんとて遂ふ天ふ麦酒して伍と作し云家ふ魔俊義西
人ふ元旦の別ゝと作し百六人の家ふまゝ御中と交ぐる
白分の茶ふあれば別ゝと和むふ乃ゝ是ふ伝ゝ元旦ふ御礼

を免しうし、百官参内奮と作る。特り家康に屬後義に朔賀の用
意を調へ、元旦を待待し、処に日天子朔を授けく百官の朔
賀を待つ。もんとの半ばしうべ。家康に屬後義を召て云く
待漏院に伺候し、百官と共に天子の出御を待る処に天子忽
然家康に出御あり。文武百官の朔賀を待つ。家康に盧後義に
ふみくく天子と謁し、各両班に分繞く殿に上らと能ば只前を拱げ
殿上と作ぎんるに法の文武法度各編と称し、寿と献じ、未明
より年の初に初めて解宴を賜り、各退出しうる。家
康に屬後義禁書と出く、皆中に投る文あり。呉用に依
大内に家康に向に結る文あるとうく各々中に来ぶとして、今日い
元旦の佳節なれども百官人の賀、家康と称し、家康

を見しうし、百官参内奮と作る。特り家康に屬後義に朔賀の用
意を調へ、元旦を待待し、処に日天子朔を授けく百官の朔
賀を待つ。家康に屬後義を召て云く待漏院に伺候し、百官と共に天子の出御を待る処に天子忽
然家康に出御あり。文武百官の朔賀を待つ。家康に盧後義に
ふみくく天子と謁し、各両班に分繞く殿に上らと能ば只前を拱げ
殿上と作ぎんるに法の文武法度各編と称し、寿と献じ、未明
より年の初に初めて解宴を賜り、各退出しうる。家
康に屬後義禁書と出く、皆中に投る文あり。呉用に依
大内に家康に向に結る文あるとうく各々中に来ぶとして、今日い
元旦の佳節なれども百官人の賀、家康と称し、家康

を見しうし、呉用に云く家康今日朔賀を勢て同り
ひ、行の半ばくかくのごく憂へうるや。家康嘆じく云く我運
命拙き四海遼を破くくようる大功を立れ共法物皆獄を待
ひくく。尚保くくるに白刃なり。唯我と屬後義のみ小獄を免し
う共未だ美名を呉ぶ能く是を憂る。呉用に云く家康
東来天理を知りうるふ行者なり。楽を忘れく憂を絶しうるや。
若悪吉凶自ら必ず憂へうること。時に黒旋風李逵を出
く云ふ。家康行ぶ此のごく悪ふなりのみや。昔日我等梁山泊
ふ主ー時に上ふ一人の主あくびて天を恐ず。乗自ら多りしよ
今日い内教免明日もい教免とく。唯内教免のみを別ひ。今
却く憂を意出ー法人却く脅同ふ通ると皆自ら安

第再びけと云く梁山泊ハ同ぶ大ハ楽しきこと。宋江罵くこと。汝
貪欲又邪くこと礼と云や。我ハ今玉象の臣とあり。ハの面目を見ハ
ぬんや。汝ハ梁山泊ハ同ぶんこと。天命を知らざる悪人なり。
手もとくかくのごとくとと云ば我変くこと。免すまじ。李逵ハ嘆じ
て云宋黒第我を用ひうんずんば。後日必ず奸臣ハ毒薬を交
く悔ひうんを多くこと。法れ毒を喫くこと。呉用ハ
酒宴を設けく。宋江ハを慰め。此夜二更の時ハ至くこと。各退出ぶ
翌日宋江十餘を引くこと城中ハ入宿者酎楼ハ趙樞密ハ館よ
ぶ。正月の佳節を賀し。城中を奔走こと。城中の軍民
共。拜礼して人和しこと。宋江師ハ半を喫くこと迷天ハ妻
喫し。呉ハの城ハ榜文を掛く。嘯ハ宋江あと禁じと云。城ハの

兵中ハある。出征の将軍ハ安ハ城中ハ入とされ。第半あれば公文
を以く命ずべし。擅ハ城中ハ入者あれば軍令ハ依く罪を行こと
と榜の上ハ書こと宋江ハ見こと笑く益憂を深こと法の
豪傑ハ知く榜ハ各反逆の心あり。宋江の心を悟ハく
自こと。これを思ひこと。知る処ハ小軍の大将ハ半を張ぶ。
学究と云ハ呉用刑部中ハ如く小軍の大将ハ対面ハ李
俊張横張順ハ活ハ。活ハ七星呉用ハ対して云。尚世の天下朝廷信
を失ハく好臣を捜ハ。捜ハ賢士を塞く北辰を行ハ。此安宋
公明及ぶを退治こと。大功を立こと。もしこれ者ハ昇を賞ず
剥榜文を抑く我家を城中へ入しめば我ハ宋家ハ臣人の
好臣。我ハと遠ざけんと思ふ。志ハ此勢ハ第ハ此処を立玄ば可

なるんや那くび軍所宋公明と議し変改しうへ宋公明ゑ宋江
なるんぞ別さと奏し欲く出立処ゑ東京をお破の好話の前と双
べんを行よう易し。呉用が云各の速情せる処を格理あり仰
我ゑひ宋公明ゑ縋しうせ。ともに宋江これあり。呉下必びえん
車示のををあんべうくび古の徳も蛇。ひあけをべばびと云をあり。
宋公明同んあさ処ゑ我们のく反逆を企る共行車をろ微出さうん。
宋宋公明義引あくび此車と行へもおしも徳あり。宋公明
同んなくびけをを止すへ。六人の大和尚と笑く再び言ばく
ん中ゑ炊ひる。呉用ハ再び笑中ゑ笑う。宋公明と宋江して云ふハ
宋宋梁山泊ゑ居るひし時ハ行るもひ稱く法和も皆梁こけ
るゑ。今日ハ教免を蒙うく胡延の話となり。那く好話ゑ如を

まぐ上息ををくび。呉ゑ伝く法大和尚怒のんあり。宋江呉と笑
くん中為るて云呉ゑ生ハ作と縋をしくかのとれとと云ふ。
呉用が云呉ゑ知ち法人の存ん書簡ゑも冨と共ををハ人の教せる
処員と紙ををハ人の恵ひ而んと云ふ。我法人の死と知をを梁
しく今くをと知をり。宋江が云縋び今法和尚呉んを捜むと
も我を死とも又忠んと改じとく翌日宋江再び法和と集ふ
る処ゑ大小の頭領ゑ居く帳前ゑ起く左右ゑ列座せり。宋江が云
我ハ郷縣の小吏ゑくありしを法豪傑の仲けゑ伝く今
日逐ゑ又出家の話となくく渤孤と言ふ。世伝ゑも人とうるハ自
立ゑくび自立ゑくび人ゑ成ずとをとあり。今郭延より榜文を出
しと我们が城中の出入を捕ぐをを理なり。我们ハ山林飛回

しうる者すなれば敢へて性粗〳〵美檀ふ城中ふ入べ必ず禍と惹
出し〳〵罪を待り又契丹名と壊べ〳〵捧〳〵と禁じて城中ふ入〳〵め
ものなどと却〳〵大なる夢ひこ汝諸人自〳〵結これと禁〳〵て忍る
をなうれ美美ある者あ〳〵べ必ず汝と山せ必俗て
上と怒ることなべ〳〵法れるこふ寨江ゞ云と呼〳〵名濱と寨一同よ
誓と立〳〵退さり此日より寨江ゞ城中ふ入べ民諸れと会
〳〵ゞと麾る斗こ澎上えの帥も近うしうべ東京の年例として
門〳〵ゞ戸〳〵ふ程〳〵の花燈と設こん宵と賞玩んと俗〳〵る寨江ゞ
笑中ふ沿ふ華書唱ふ楽和と面濱〳〵て云今東京ふ元〳〵元
燈と設け元宵と云ひ豊年とわり今上皇青天氏と楽と同じう
〳〵ひ〳〵沿中沿ゞ閑熱なる俗〳〵と笑ゞ我ら下と形

と更〳〵城中ふ行き入吾ふ義燈とうん〳〵同うべ〳〵ゞ到ふと綱く
ま〳〵ふ人己ふ濱と定し知ふ黒旋風宋達を入〳〵云汝ふ人
花燈とうんと綱〳〵と我ら孝宋より見と知りいうんで我と俗ハ
ざる事ゞ華書云汝と俗ふ最易ことなんす汝ハ只酒と好む中ふ
ム洗引ひ〳〵し今情文と掛〳〵緊〳〵我们と禁じうふ城
中ふ出入ることゞ華〳〵と惹出ゞ城令の死と
綱ひべ〳〵宋達云我ハ敢て酒と避べきる吾ふ俗引さよ惹
ま〳〵云己ふかくのどうんで我肯て汝と俗ん明日夜中と換〳〵旅人
の形ふ出立べし我汝と共ふ城つふ行き入ん宋達是と笑〳〵大ま
扮ひ笠首旅人の形ふ出立〳〵惹まと特惹ま形と変〳〵旅人の
様ふ出立ふ宋達と引〳〵城門ふ陣ひ此時事和ハ時近と同性

薩書李逵
街講釈を
聽
軍談
明月

明月

〜〜と逃〜城中へ入〜とく燕青は陸橋門より入び〜〜。封五門
より李逵を入李逵と共に柔家瓦の上を逃ふ柔り多処に拘探の
用ふ縄の雲〜あり李逵と共に燕青と〜〜〜〜〜〜〜〜
人の肉を抜入ぴと伸して肉とうたふ一個の人三寸志と縁〜〜
法人ふ安〜めれ打関雲長が毒箭ふ中りし処を俗判〜て云昔日
蜀の関羽が左の肩と毒箭と以射〜と毒已ふ骨の肉ふ入り腐
醫士華陀が云ふ刮骨療と云ふ法ひうろ〜〜〜河の柱と立て
上ふ後の張とつけ〜〜〜と穿ち又索と以て牢く柱の上ふ柱の
巻〜〜後皮肉を裂を。骨二三分を削て毒箭を除〜又油
線を以て口を縫ふ膏薬を貼て肉ふ熨薬を用ひ百日
月の肉ふ平復すべし。扨も此燕青の名者一のとふ〜〜〜

拘〜〜と云ふ笑云ふ笑云ふ笑ひ大丈夫い死
生を懼ぢ次や一手とや河の柱後の張おと刺ふ及び肉と割骨
を削るもあり苦〜かび汝が仏ちまく〜ふ張活せとて常のごく
事あり〜猶と〜〜花の手を体〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
削て毒とれ〜ふ関云い面を云ふ〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜と〜〜も絶〜〜ふ李逵は損のと論て笑ひ〜人
知〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
李逵が云笑云の箭を抜と薬治するごと以と是ふ大丈夫なれば
特是べど唱ふ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
と思〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
李逵が云笑云の箭を抜と薬治するごと以と是ふ大丈夫なれば
特是べど唱ふ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

べ燕青石を拾ふ李逵と引くべし処を立去るべう二三條の街を過ぎて
一人の漢子石と瓦と投げ酒店の内へ入れば酒保の主
大ふ怒り曰汝他まで我店の酒肉を敷く價を償べ却て我家
と打ち傷ひ人の面をこそ見ぬ李逵笑て
怒る彼漢子と白眼汝行ぞ弱き者と欺ひ〳〵られとなりぬや彼漢
よ〴〵云我者年彼ふ招と借りれ共ひ〳〵ぬ酒
合の價を償ざるふ汝行の手ろ〳〵我と罵るや我が近日拙
紂ふ伝〳〵南の地ふ出流れ我彼地ふ知りなば必ず付死〳〵
屍と戰場ふ晒すべし〳〵ぬ人うべし処うて汝と俳合が却〳〵よ〳〵棺槨
の内ふ入ることあ〳〵ん汝ふ〳〵無〳〵對ふ知ぬ李逵笑
と笑〳〵大ふ怒り汝行で伝ぬと云や。今張招討とこんが江南ふ出

流ることい世間ふ多〳〵流あ〳〵べ汝必ず我と縁せをかうれ
〳〵ぬ人名著と捏ぬ已ふ知ふ甚多中ふ入〳〵ぬ人の
去を待め遂ふ李逵と引〳〵べ処ふ一彩の菜蔬ふ入そうの光菊
ふ行りぬ〳〵ぬ者ふ〳〵爭ひとなり〳〵る漢ふ近日張招討と云者
ふ伝〳〵江南ふ出流ることい李逵笑〳〵
失客ふ〳〵べや今江南ふ流れ方臘八州二十六縣と奪ひ刻ち
睦ふ〳〵ふ新〳〵出ふ自〳〵號〳〵一王と〳〵近〳〵
揚ふ攻〳〵〳〵ぬ汝法出〳〵ぬ見ふ国〳〵朝廷張招討劉邦者
兩人と見向方臘を打〳〵めう人と〳〵ぬ李逵出半と笑〳〵ぬ
第揚をとて出ふ笑中ふ向りて軍師呉用ふ彩と術へられば呉用
ふ此滑稽を笑〳〵晴ふ拔び刻年ふ対〳〵て云べ投方臘と征

伐あらんがため朝廷より張招討劉招討と云ふ両人よ
しを差遣あらざるべし。第江邊と呼て云ふ我人なる人〻〻第五
てらふ五とをぶ寄て〻〻ぶ太ら宿太尉ふ問ふと申て天子よ
ふ奏聞あらしめ給ふ我の付て〻〻我們発向すべしと云ふ法師の
存念いいん法大なる大ふ怒んぐ云ふ第志のる命出ずるあ人く違
んやと云ふ皆を織ふ問じかうり。第目第江奏聞と云ふ城つりふり
云用ふ云ふと告く城中ふ入て宿太尉が我ふ問あ〻宿太尉
ふまきこえれば老尉之問〻云ふ案孫悲うあきや。第江言ふ云。
今稽文と撰〻〻第〻と禁じの一つ申ふなる〻て城中ふ
入ぶ老尉の為報をあすこともまれまする事ふ云と愛るの〻。
今日夫波ふ来ると雑の為ふあ〻ぶ今江邊の方蘭を〻の列

郡と奪ひ自〻年号を立て〻ふ〻〻楊列と付人と号う〻
を〻〻へ号く〻も第〻人る久し〻〻第尾〻と呼中ふあ〻ぶ
く不可し。我敵〻軍るを知し。越前ひ太と尾方と渡し。一我
と所さんふ加くふ老尉宮〻〻奏聞と遂う人。宿太尉是と聞て人
ふ怒ひ打軍の存念我を合ふ合て〻り是列は家の猛ひまんぶ我
宮〻〻奏聞と遂べき日今日〻を〻〻人第江是と解〻〻
て為ひ宮中ふ同り法れふ彩と告ふる。楊も宿太尉ふ奏日ふ
朝ふ問〻〻る処ふ文武百官被事殿ふ於〻〻天子ふ〻〻人ふ於て方
蘭ふて〻を評議して云ふ方蘭今八列二千ふ騎と為て自〻任ふ郎迎
く又楊列を犯さんと号る。後ふ天下の騒動ふ年〻〻ぶ〻と百官
一同ふ奏聞ふ天子ふ乞て蔵聞ふ宮〻〻迎後方蘭を征伐せん

とゝに朕已に拓討の勅を垂れ給ふ。汝百官美良針おゝび速ふ麥雲ちよの時ふ宿古府をこゝ出奏しるゝ所為を以て絲已に八列と奪人く。勢活大かゝれば又りの遠と近活し。田虎王慶と平げ勲功の大切寡にあと以て張拓討の副先世おれ副先と前部とゝ故と討しめるゝ必ど大切と云べし。天子先と笑うひゝ大に感あり汝ゞ云処朕ゞ云ふ金りゝ寡にあと臣と宣ば省虎皮勅命と奉り新て寡に屬義兩人と引拔番級のゝふ知る。天子宋江と云ひゝ。此れ都まゝ。屬義を封じて平南副統帥と宣ふ。甲一列名る一結。絲紙二十丈足と賜。絲の正れ軍編れ軍ゝも

各金銀絲紙を獲い勲功と云ふ。名皮爵を加へ給ふ。とのゝ半ゝ已に日限と定めゝひゝ。寡にゝ。屬俊義勅命と奉ゝ天子ふ紙ゝ。天子又宣ゝ汝おが用ふ。絲紙を獲金大賞ゝ。去と絲良ると徽ゝる。皇甫端と云ふ者と朝廷ふ留めゝ先と用ん汝明日此兩人と獄ゞし。寡にゝ。屬俊義情んゞ紅葉し。遂ふ朝廷と出ゝ。九中ふまゞ拔び笑中ふ回りて法れと集め勅命の勅細ふ拔りしゝ。法れ紙ゝ大拔ゝ各用ふと綱へり。寡にゝ。日金大賞。皇甫端と朝廷ふ送ゝ。彼の紙れ一人も法ゝ軍中ふ拔へ。ふ養内ちんと議ゝ。知ふ。事大所使者と以ゝ書生蕭嵩と出し。王大尉又淚叫ふ舉和ふ筆欲と獲と笑及んゞ新りふれと拔む。寡にゝ辞ゝと往らずして又此

兩人と送り給へ五人頭領と減じ給へ宋江が軍中を遁れ出て額色を
變ず。扨彼江南の方臘が系錄只の山中に場し。撫美こゝるが一日の平
ふ陽に已が死と看し仏ふ所に平天冠と裝と分て袞龍袍と云へ
たる形樣にて此より綠林と金て軍馬を裝め則清溪縣のら
封し淳化の中に宮殿門樓を造り。睦州歙州に又殿に
と宮殿造文武百官を設置し。方臘が數次分と方臘が
る彼八人の別剣別賜州杭州蘇州常州湖州宣州泗州に
彼二十人の賜い此八人の間に有り。今方臘が有る処の遠の玉うも
扨大に度とて軍馬を又多くの方臘に玄狐に宋江に用を使へて宋
宋とお出られば宿を射。排樞密自ら造く三軍を裝へ宋
の大勢に兵船を拵へ泗水より淮河に入て淮安と金三郡に横州

ふ倉合に宋江虛後義各宿を所。樞密趙氏に射て相別
兵と五隊に分て進発し。楊戩と金で抵ふる。蔡京に敗に淮
安に出て。樞密と戰を設け。宋江と待受る別城中に
ことを沙云。西に別楊子大江九に三百餘里に大海に通じ
こと江南の要害なり。江と渡て別淮別なり。今方臘が
下の。樞密呂淮叢元に十二人の統制官に江岸と守る。
淮別と江ぶんに方臘が大軍に故に雖ども宋江と戰
軍師呉用と方臘に云。南に大江に沿て防を探るべし。
兵と渡らんや。向に遼と攻し時に淮河に沿て名水軍の訳に出て切
と進ぶ。後江南へ後んすべし。宋軍と利あ呉用が

云揚子江の内に金山焦山とて二ツの山を設く。深く江辺の城郭に達す
先殺害の作法を宥して彼地の動静を伺せ。其余の船を用ひて之を渡
たらば可ならんや。然ども分明に是を知り。先深く計を廻定也
人。宋江このとき則水滸の諸大将を褒めて向ふ。汝等の中
誰か行て先敵地に赴き。実しく動静を窺ひて聞らんや。時に
四人の大将進て出て自ら敢て往らんと一同に答へける。宋江此四人
を見るに。一人は小旋風柴進。一人は浪裏白跳張順。一人は拚命三郎石秀。
一人は活閻羅阮小七なり。宋江大に悦び。汝四人二手に分るべし。張順は
柴進と一処に行。阮小七は石秀と一処に行。直に今金焦両山に到て。城
宿を求め潤州の虚実一々詳に窺ひて揚州に回り。要細く消息
を報べし。四人は其命を承り。各両人の僕を従へ旅人の姿に出立達

に宋江に辞し。先揚州に赴きけり。此時その辺の百姓らは宋の大軍到るよ
しを聞て。各々村中を避逃ければ。人家には一人の男女もなかりける。
柴進と張順は両人の僕を引き。瓜州を望て進発す。石秀阮小七も
同じく両人の僕を従へ。焦山を望んで趣きける。抑此九千三百里の揚子大
江は遠く三江を接へり。一ツは漢陽江。一ツは潯陽江。一ツは揚子江。潤州
より西に大海に到る。此江の間許多の所に有し。故に西へ万里江と云へり。地は
呉と楚とを分て江の内に両座の山あり。一座は金山。一座は焦山と云。金山の上
に一座の寺あり。山を繞て建るゆへ。これを寺裏山といふ。焦山の上にも
一座の寺あり。山の凹に蔵れて形見へざる故。是を山裏寺と云。此二ツの山。
もと江中に生じ。楚を尾とし。呉を首とす。一方は淅西潤州。今の鎮江
是なり。扨張順柴進は北固山の下を望て来るに。都て是白粉塗の牆

號を建岸辺にハ許多の兵船を纜ぎ江北の岸上にハ只一率の隊も无
へだてゝ一個の人もなかりしが柴進が云瓜洲の路上にハ家ありといへども人
あらバ又渡し船もあるべきといへど彼敵地の虚実を窺りんやと
暫らくためらひてぞ立たりける

○張順夜金山寺に往

此時張順柴進に対て云宋兵営の内に入て敵の人我自ら水を
越て金山の下に到り宿の静を窺ひ同り柴進を察て大
江に浮び四人ひそかに江辺に到り一軒の草屋の内に入人やある
と問ひける処に窩竈の辺より老婆出来りしが張順問て云老婆
汝が家にハ何の客人あるや老婆答て云今宵朔より大軍を据
て方艘を幾かの風吹たりけるかに此所に住居する人家

悉く彼処に逃去ぬ此家の老ども較く他方に行て唯我一人を留
て家を守らしむ張順が云我們二人ハ江を渡らんと欲す何れの
処に船あるや老婆が云此節ハ一艘の船もなし前日呂師嚢が宋兵
の来るを防ぐ為此処の船ども悉く奪取て潤州に漕しめたり張順
が云我們こゝに聞く粗を携ふ汝此家を預て傳く二三日逗留
あらしめんや宿賃を厚く与ふべし老婆が云屋を備んハ易けれど
も屋に寝る所あれバ幸に手を頼く不自由なり張順が云
是なく行なバこれのことを請りんや老婆又云然らバくだ近日宋の大軍
到るべし其節ハ必ず客分難儀ならん張順が云我們ハ大軍
が我自ら是を避ん汝恐ることなかれとて柴進と二人を倶て内
に入り暫く休息して飯を用ひ張順再び江辺に到て

張順敵地を窺んくわ星月の夜楊子江泳ぐ

江辺の風景をとゝのふ。金山寺は江のまん中ふあり。張叔夜ふあり
中ふ泊りの呂樞密侍ゝ此山ふ来ゝ巡ゝとゝゝん。我れ今宵
水を渡ゝ金山のトふ来り。清風と寂ゝ同じとて再び茅屋
ふ帰ゝ。宋を召告ゝゝへ。江辺ふ唯一艘の小船もあゝべし。此所ふて
も歌の動静を待んと高ぶゝ。我今宵夜張を設ふ載
き金銀を携ふつけ。水を渡ゝ金山寺ふ行絡絡と扁舟ふ送ゝ
歌の動静を窺ひ。同ゝ宋公明ふ清風と報ずべし。宋公明
処ふ至ゝ待ゝへ。宋を召と呼ゝ可と同じられべ。張叔夜
月を眺へゝ再ゝび江辺ふ来ふ。此夜星月明ゝふ風深静
して水天一色。張叔夜張を設ぶゝ設ふ載き金銀を乗ゝ携
拾り。扁舟一艇のカと常ゝ水中ふ船入ふ江ふ新をとる。張叔

宋水滸の達人なれば水の物ひ自ゝ舞け。張叔夜を清江となし。
張叔水中ふ生ゝ漂ゝと走ゝ。已ふ金山の下ふて石崖
の辺をとゝゝる。一艘の小船繋ぎ。船の上ふ跳
宋江ふ載ゝる夜張と知てゝ。船の上ふ跳ゝ
ふ。清風ふ三文の銭ふ代ゝ。上流を見る。張叔夜時前と揚げ上流を見
る。一艘の小船漕来る。張叔夜中ふ探ゝ。此船ふ歌の唱ふ
ゝふ此処を通ゝ。船の上を見ゝ。歌の唱ふ
なれば。舟を動ゝと結ゝ。船の上を見ゝ。江中ふ跳入
水の内ふ潜ゝて。彼船の辺ふ。船の上を見ゝ。女人
の水を汲ゝ。只管ふ辺ふ漕来る。張叔夜中ふ。刀を抜情ふ
船傳ふ待ゝ。彼両人の来を欲んとゝ。彼水をこれとこそ

ふ水中ふ飛入る張叫くも彼船ふ跳上り。船と漕完んと
せし時鱠の肉より又夫人の漢よ走り出ぐると張叫くも一人
の漢ふと水中ふ跳飛けまぐ彼一人の漢ふ大ふ驚き再び鱠
の肉ふ走り入る張叫罵くに汝い何ぞ走り入るや。吉ふ出て
告知せば汝を焼さん彼漢ふ曰く別ふ相ふ定浦村
と云処ふ陳将士と云者の家人なり。主命を奉く江州ふ出て
呂梁窩ふ報賞五万ふと献上せんと欲ぶ梁窩呂と欲ぶ別
一人の虞候と共ふ暫く定浦村ふ逗留す。五万ふと船三百艘と乗
ひ。ぐれふ行く今此処ふ来り。張叫ぐ云虞候ぐ姓名いいんぞ
何ぞふ生や。彼漢ぐ云今豪傑の数しるひぬる漢よい別虞候
なり。姓名い葉吳と。張叫又問く云汝ぐ姓名いいんぞ何ぞ

汝ぐ云や。船中ふ又何ぞのあるや。彼漢ぐ云系ぐ姓名も
呉成と。今年正月七日ふ江と渡る時我等呂梁窩の命を
受り獲別ふ来る別ふ三大王ふ陳将士ぐ存命と作へしぐ
三大王ふ呂と欲ぶ獲呉と。旅三百餘人一ふ成し二色と陳
将士ふ殺うぐ今別船中ふ積り。別ぐ豪傑系ぐ一人と云
う人張叫又問く云汝ぐ主人の名ぐ何ぞ。答ぐ云
成ぐ云従く數ふの人るあり。又夫人の男子と称ぐ皆豪傑の
名ふ。嫡男ぐ名ふ陳素と。中。張叫妻細ふ問ふ
と揮く彼呉成を水中ふ破く落し。別く船と漕く凡別ふ回
り別紫を呼ぶ。幸の呼て作り。彼三百餘の船一ふ船
の衣く鱠の肉より船ふ上て二撓の舟ふ作しる張叫又ふを

漕出〳〵再〳〵び金〳〵山の下ゝ動り奥〳〵動静を窺ひて彼の
船舶の上ゝ垂〳〵衣服を脱〳〵これを洗〳〵又孔明ゝ同りしうば天
色已ゝ白みり張順遂ゝ岸ゝ上り二三丈の沿と彼老婆ゝ送り
丈人の僕ゝ能衣服の二荷の擔と挑せ揚州ゝ同り入る此
時家江ゝ家るゝ知る〳〵揚州の城下ゝ死せり揚州の丈人ゝ酒
宴を設けて家を別を城中ゝ邀へ毎日懇勤ゝ看待三家ゝ至
るを一〳〵酒合と喜〳〵けり扨張順ゝ揚州ゝ同く家江
ゝまく彼擔ゝ士ゝ方彌ゝ紙〳〵近日紙を等く江と渡り
揚州城を攻しめんと思ふ故ゝ伴へ又江中ゝ吳成と
殺〳〵と戦ふ吳成ゝ敗れて奥〳〵行り入れば家に大ゝ怪び刑
ち吳用と結〳〵計を為彌ゝ吳用ゝ云ふ決ゝ機会ゝ上へ沿

州と知んと堂と反ふ易し先陳ゝ士ゝ招へなば大半立
知ゝ成んぬべし計ゝかくのごとし此の如〳〵と伝伝しうば家ゝ別これと
喜く家州の云紙ゝ合へり去来計を細〳〵と語る燕青と虞
候葉光ゝ所ゝ出立て解家と南家の所ゝ出立て定浦村の路
径と同しむ解珍ゝ擔を挑ひ燕青ゝ続く三人揚州と出立
ち定浦村ゝ絶城より四十絵里離れ〳〵ゝ遠く陳ゝ士ゝ家と
望む門家ゝ二三十人の家士一招ゝ紫衆〳〵ゝ奏上ひ時燕青
術人の体を用ひ〳〵彼軍士ゝ問く云陳将士ゝ彼ゝ所ゝ
ゝ家士ゝ云ふ客ゝ行きの処より来りゝ人や燕青ゝ云我ゝ
揚州より来り家士ゝ乞ふ乞を受く彼ち燕青と客廳ゝ案内
弥ゝ士ゝ彩と告れば特士ゝ出〳〵燕青ゝ対面〳〵同け

うの宮下へ行きて処より来たりぬや。夢まだ覚めず。左右の人と遮けるなり。我敢く来たると告げん。陳將士ぞ左右に扶く我が心猿の老いたるにわかに嬉しく汝ぞ告げ給へ夢まだ覚めず

く云ふ来い葉芝とや老いたる呂極密が幕下の虞候なり。正月七日ふと云の使者呂成と来たる呂極密の命と称して義別ふ桃云の存念と二大王ふ行へられば三大王を抜んぐ上つふ麥吹あり。処ふ上より伴くん桃云と対ひて。揚別の角井と。両人の長男ふ呂極密桃云の上へて宮爵と定めうんとの内半ニ呂成とも同じうんとの作ましう。恐らく病ふ紀さしく同じと能と

ば。程極密府ふ留まり。今上へ偽義とし。旌三百向夜一子処と。揚云も又急ぐ彼粮を[illegible]別城を送りうへ必ず延引

しのふとなりうし陳將士を呼ぶ大ふ怒び陳益陳泰と呼出す

う。夢ふ延しむ。夢ふ覚めたる。[illegible]

産ちんや陳將士が云汝い呂極密の使者かれば我ふ文より珍客なり。何ぞ慇懃の事と云や。夢まだ覚めず

夢を解ずるなり。[illegible]

山巻ふ王左府とぞう書云ふ[illegible]

新編水滸畫傳卷之八拾壱